



北海道公立大学法人
札幌医科大学
Sapporo Medical University

札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor*

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	利尻島における離島地域医療実習から得た学生の学び—参加学生の実習後レポートの分析—
Author(s)	仲田, みぎわ; 山田, 恵子; 高橋, 延昭; 宮下, 洋子; 片倉, 洋子; 石川, 朗; 田野, 英里香; 明石, 浩史; 相馬, 仁
Citation	札幌医科大学保健医療学部紀要, 第 12 号: 27-35
Issue Date	2010 年
DOI	10.15114/bshs.12.27
Doc URL	http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6357
Type	Journal Article
Additional Information	
File Information	n134491921227.pdf

- ・コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
- ・利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- ・著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

利尻島における離島地域医療実習から得た学生の学び

ー 参加学生の実習後レポートの分析 ー

仲田みぎわ¹⁾、山田恵子²⁾、高橋延昭³⁾、宮下洋子²⁾ *、片倉洋子¹⁾、
石川 朗⁴⁾、田野英里香¹⁾、明石浩史⁵⁾、相馬 仁⁶⁾

¹⁾ 札幌医科大学保健医療学部看護学科

²⁾ 札幌医科大学医療人育成センター、教養教育研究部門

³⁾ 札幌医科大学医学部附属臨海医学研究所

⁴⁾ 札幌医科大学保健医学部理学療法学科

⁵⁾ 札幌医科大学附属総合情報センター

⁶⁾ 札幌医科大学医療人育成センター、教育開発研究部門

*現北海道文京大学人間科学部健康栄養学科

本学医学部、保健医療学部の1年生を対象に実施された、利尻島における『離島地域医療実習』の参加学生に、実習に対する①自己目標、②自己目標に対する自己評価、③実習での学び・感想からなるレポートを課し、その記述内容を分析した。実習参加者35名中32名の学生からレポートの提出があった。その結果、「ウニ発生実験での発見」「利尻島の自然と人々の生活が密接につながっている感覚」「体験し見えてきた離島の暮らし」「利尻島の小学生が教えてくれた子どもの時空」「利尻島の人々の健康」「利尻島の医療の現状」「地域で働く医療人に必要な資質」「医療福祉サービスを受ける人とかかわる体験」「触れたあたたかな心」「実習中に行った仲間づくり」「意識させられた学習の不足」「明確になった地域医療に対する自己の意識」「自己への気づき」の13の学びが抽出された。学生は、利尻島において島の自然や人々に強く惹き付けられ関心を高めながら実習し、その体験を通して利尻という離島への理解を深めつつ、将来自分が医療人として志す方向を自己に確認していた。

<キーワード> 離島地域医療実習、学び、生活体験

Students' learning in "Community Health Care Practice on Rishiri Island"

- Analysis of their reports -

Migiwa NAKADA¹⁾, Keiko YAMADA²⁾, Nobuaki TAKAHASHI³⁾, Yoko MIYASHITA²⁾ *,
Yoko KATAKURA¹⁾, Akira ISHIKAWA⁴⁾, Erika TANO¹⁾, Hirofumi AKASHI⁵⁾, Hitoshi SOHMA⁶⁾

¹⁾ Department of Nursing, School of Health Science, Sapporo Medical University

²⁾ Department of Liberal Arts and Science, Center for Medical Education, Sapporo Medical University

³⁾ Marine Biomedical Institute, School of Medicine, Sapporo Medical University

⁴⁾ Department of Physical Therapy, School of Health Science, Sapporo Medical University

⁵⁾ Information Center of Computer Communication, Sapporo Medical University

⁶⁾ Department of Education Development, Center for Medical Education, Sapporo Medical University

*Present address : Department of Health and Nutrition, Faculty of Human Science, Hokkaido Bunkyo University

Community Health Care Practice on a Remote Island was held in Rishiri for students in their first year in the School of Medicine and School of Health Sciences, Sapporo Medical University. The participant students wrote reports about their objectives, self-evaluation, learning & impressions of the practice. The purpose of this paper is to describe what the students learned in "Community Health Care Practice on a Remote Island." Thirty-two of the 35 participants turned in reports, and the reports were analyzed. As a result, 13 categories of learning experience were found: "discovery by experiments on the birth of sea urchins", "the feeling of a close relation between the nature and the people on Rishiri island", "life on a remote island which was understood through the experience in this practice", "the space-time of children learned from the schoolchildren in Rishiri island", "the health condition of the people on the island of Rishiri", "the medical state on Rishiri", "the elements essential for community health care staff", "encounter with warm-heartedness", "making friends during the practice", "recognized lack of study", "clarified awareness for community health care", and "self-realization". It was found that the students went through many programs and events with emotional experiences that promoted greater understanding of life on the remote island of Rishiri.

Keywords : community health care practice on remote island, learning, living experience

Bull. Sch. Hlth. Sci. Sapporo Med. Univ. 12:27-35 (2010)

はじめに

平成19年度の文部科学省特色ある大学教育支援プログラム（以下特色GPとする）に採択された本学の「学部一貫教育による地域医療マインドの形成」において、『離島地域医療実習』が平成20年8月17日から5日間の日程で実施された。この特色GPは、平成16年度から3年間実施した文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム（以下現代GPとする）「地域密着型チーム医療実習」^{1)・2)}を発展させたものである。現代GPは2年次3月～3年次1月に医学部、保健医療学部の学生を対象に開講されたが、特定の学年を対象にした取り組みのため、連続性に欠けるという問題を抱えていた。そこで、特色GPでは新たなカリキュラムとして1学年から4学年生を対象とした「地域医療合同セミナー」が創設され³⁾、さらに1年生に対し「離島地域医療実習」が開講された。本実習は平成13年～19年までの7年間、医学部単独で行われていた『臨海実習』を発展させたもので、生き物（命）を知るための「生物実習」、島の暮らしを知る「離島生活体験」、離島保健医療を学び、仲間づくりをする「医療実習」の三本の柱から構成されている。本実習の特徴のひとつは、本学医学部、保健医療学部混成による小グループの編成での学習を行なうことで、文献⁴⁾に記載されている内容で実習を行った。参加学生は実習開始前に実習に対する自己目標をたて、終了後にレポートを提出した。専門的な学習がほとんどなされていない時期の実習であったが、レポートには離島地域医療実習から得た多くの学びが記載されていた。ここでは、本学の離島地域医療実習で学生がどのような学びを得ていたのかを明らかにすることを目的に、実習後レポートの記述内容を分析した結果について報告する。

実習の概要

離島地域医療実習は、医学部医学科、保健医療学部看護学科、理学療法学科、作業療法学科に属する1年生が学科混成の6名以内の小グループを作り、4泊5日の日程で実施された。この実習の特徴として、殆ど専門の学習を経験しない時期の早期体験実習であること、大学のある札幌から約400km離れ、バスで約6時間、フェリーで1時間40分の位置にある離島での実習であること、医療のみならず生き物（命）を知る生物実習と島の暮らしにふれる生活体験を行う実習であることがあげられる。詳しい日程表は文献⁴⁾に示されているが、「生物実習」、「離島生活体験」、「地域医療実習」の順番で行われた。

両学部から35名（医学部医学科17名、保健医療学部看護学科9名、理学療法学科5名、作業療法学科4名）が本実習に参加し、医学部学生17名中8名が地域医療枠で入学した学生であった。実習期間中、学生は町の一施設に滞在し、

「生物学実験」はこの施設内で行われた。ウニの受精卵観察を実習2日目に開始し、実習期間中毎日ウニ発生過程を観察した。学生は、実習スケジュール以外の空き時間に、地元ボランティアの方々の助けを借りながら、周辺の散策などを行った。「離島生活体験」はこのような日常的な部分とコウモリ観察や沼めぐりなどの自然探索の体験、実習3日目に実施した利尻島の重要産業である水産加工の仕事体験から構成されていた。島の暮らしの基盤にある昆布加工とウニの製品化の体験では、地元の方々に学生の作業を指導していただいた。「地域医療実習」は、実習初日と3日目夕方に行われた保健所支所長や地元病院・診療所の医師、事務長による“医療講演”と、4日目の“医療実習”で構成された。医療実習では、医療や生活福祉の施設利用者や小学校の児童とともに過ごし、各実習施設でのプログラムにも参加した。また家庭訪問に同行した学生は在宅療養者や家族の様子を見学したり話を聞いた。

本実習には、実習リーダーを含め両学部の教員7名が同行し、各実習の指導・引率、滞在中の生活のサポートを行った。

生物実習以外特に明確な達成課題を設定せず、様々な体験を通して利尻島という地域を知ること重点を置いた。なお、本実習が行われた平成20年度は、大学の履修単位として認められていなかったが、参加学生はこのことを了解し参加した。

方 法

分析対象：平成20年度地域離島実習参加学生35名中、提出のあった32名の実習後レポートを対象とした。

課題レポート：レポートは実習前に記載する①自己目標と、実習後に記載する②自己目標に対する自己評価および③実習での学び・感想の2部から構成されている。レポートフォームは学内ウェブ上に作られた「実習支援サイト」内に提示され、学生は実習前後にこの「実習支援サイト」にアクセスし、上記の項目に加え、実習後に学生は離島地域医療実習全体に対する意見・希望を追記した。学生レポートに対して、実習リーダー並びに実習グループ引率担当教員がウェブ上でコメントを記入した。

分析方法：レポートを何度も読み返し実習からの学びが記載されている文章を全て抽出した。それらを意味のまとまりごとに文節に区切って要約し、類似記載内容についてグループ化およびネーミングをする質的な分析によりカテゴリー化を行った。また学生が今後の自己課題とした記載内容についても同様の方法で分類した。分析は複数名の教員で行い、妥当性、適応性、一貫性の確保に努めた。

倫理的配慮：本稿作成にあたり学生に報告の趣旨を説明し、結果に関する匿名性は保たれ、協力の有無による不利益を生じないこと、協力は拒否できることを説明し、承諾を得た。

用語の定義

1. 「学び」について

添田⁵⁾は「学」と「習」の語源的な解釈から、学習を「模倣や繰り返しの練習により行動的傾向を獲得すること」と定義し、学習には2つの要素－既存の行動パターンの熟達という外面的側面と、新しい行動傾向が取れるようになるための習慣、知識、概念、体系、認知構造などの獲得や組織化という学習過程の精神的・心理的側面－が含まれるとした。またK.B.ゲイパーソンら⁶⁾は、学習とは「経験を通して人々が変化していく過程であり、表面上に現れる行動やふるまいの変化ともいえるし、行動には現れない新しい認識や洞察力を生み出すものともいえる」と述べている。

これらのことから、本稿では、知識や概念、認知構造の再組織には時間を要するという側面を踏まえ、実習の学習に対して「学び」という用語を用い、以下のように定義する。

学び：将来の人間性のある医療人としての行動を構成する認知構造に影響を及ぼすと思われる知識・情報・思考の獲得であり、気づき、情緒的揺さぶりの体験も含む。

2. 「地域」について

地域看護活動における「地域」の捉え方として奥山ら⁷⁾

は、地方公共団体の行政上の範囲を基盤とし、「サービスの供給単位、計画単位」としての設定という意味合いをもつとしている。金川ら⁸⁾は、行政区画で生活している人を含めて地域とし、地域を越えて一つの社会を構成している人々の集団も広義の地域であるが、この場合はコミュニティの表現が望ましいとしている。

本実習が行われた利尻島は地理的に明確に区切られており、利尻島特有の産業や人々の生活がある。本実習の主な目的は、学生が「その土地に暮らす人々の生活を理解すること」であったため、本稿では「地域」という用語を以下のように定義する。

地域：地理的境界による地域と共同性をもつ社会（コミュニティ）を含めて地域とする。

結 果

学生がレポートに記載した内容を分析した結果、離島の地域医療に関する学びとして13のカテゴリーを抽出した。また学生があげた今後の自己課題としては、6つの内容があった。これら13の学びと実習中に行われた体験との関係および学びの時期を図1に示した。

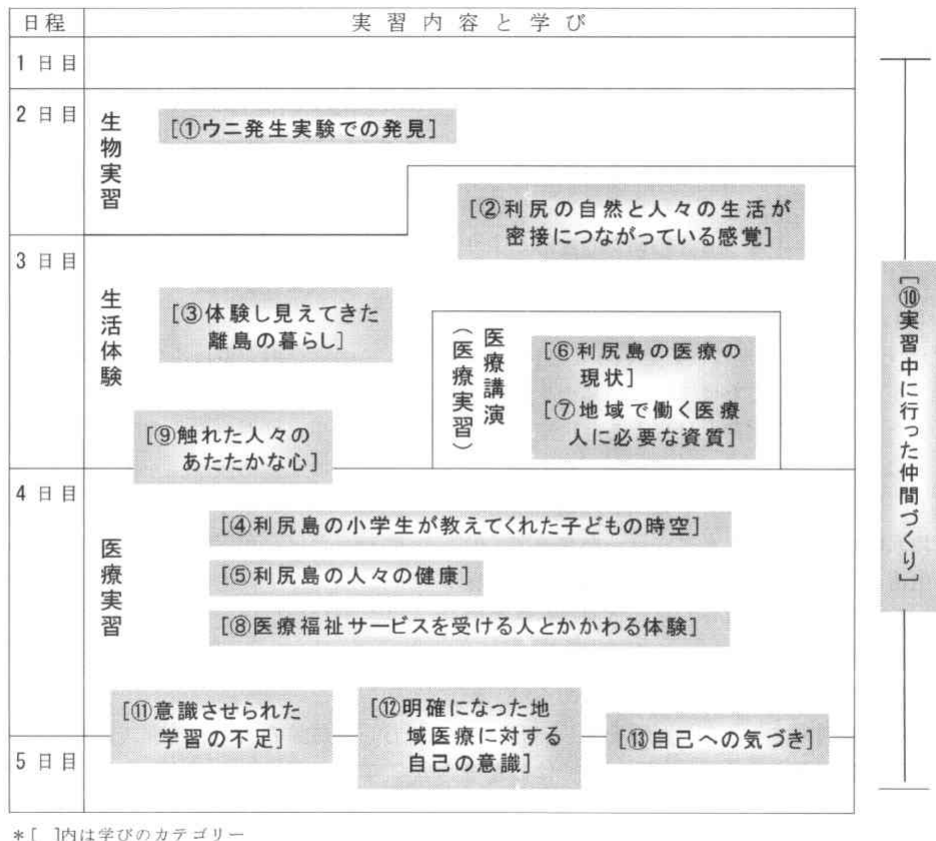


図1 離島地域医療実習の構造と学生の学び

1. 離島の地域医療に関する学び

学生の記載内容から抽出された学びは、1) ウニ発生実験での発見、2) 利尻島の自然と人々の生活が密接につながっている感覚、3) 体験し見えてきた離島の暮らし、4) 利尻島の小学生が教えてくれた子どもの時空、5) 利尻の人々の健康、6) 利尻島の医療の現状、7) 地域で働く医療人に必要な資質、8) 医療福祉サービスを受ける人とかかわる体験、9) 触れた人々のあたたかな心、10) 実習中に行った仲間づくり、11) 意識させられた学習の不足、12) 明確になった地域医療に対する自己の意識、13) 自己への気づきであった。以下、これらのカテゴリーに沿って学生の学びについて記す。なお、文中の『』内はサブカテゴリー名を示す。

1) ウニ発生実験での発見 (表1-1 参照)

ウニ発生実験について学生は実習期間中に別途生物学レポートを提出しており、実習後レポートにこの実験に関する記載は多くなかったが、『驚きと魅力に惹きつけられたウニ発生実験』と『体験したウニ発生実験の難しさ』の学びが抽出された。これらは生命誕生に対する純粋な感動と、ウニ発生プロセスを守る環境維持の困難さの体験であった。

2) 利尻島の自然と人々の生活が密接につながっている感覚 (表1-2 参照)

学びのサブカテゴリーは2つあった。夕陽や星空、光る海、大荒れの海、利尻山の雄大さなど島の自然そのものに感動し、多くの学生が『心に残った利尻の自然』を表現していた。また、印象深い島の人々の力強さと優しさを、利尻島の自然の厳しさとその恵みを受けて生活していることに関連させ、『わかった利尻のいいところ』と捉えていた。

3) 体験し見えてきた離島の暮らし (表1-3 参照)

学生は5日間島で生活したという感覚をもっていた。ここでの学びは“島で生活するとはどういうことか”を体験的にわかり、利尻島の人々の暮らしを内側から理解しようとするものであった。学びのサブカテゴリーとして『理解した利尻島の暮らしの不便さ』『体験してわかった水産加工の仕事』『わかった気がする島に住むということ』『自分達の生活と全くかけ離れているわけではない島の生活』の4つが抽出された。学生は都市部とは異なる利尻島の暮らしを「不便」とはしたものの、「不便であっても不快ではない」と表現し、物資不足があっても充実した島の生活を感じていた。地元の方の指導でなんとか行った水産加工の仕事は、島の生活を支えている産業として経済面からの理解につなげていた。仕事体験のみならず5日間の生活の中で、島の暮らしに対しアンテナを張って多面から理解しようとしていた学生の様子が伺える。2名ではあるが、表にあるように離島を特別視することに疑問を呈し、その地域特有の長所を生かし短所を改善すればよいのではと考察する記述も見られた。

表1. 実習からの学びのカテゴリー(『』内はカテゴリー名)

表1-1 【ウニ発生実験での発見】

学びのサブカテゴリー	学生の記載例
驚きと魅力に惹きつけられたウニ発生実験	「先生が極められた放精方法は新たな発見だった」「ウニの発生を通じて人間の命の尊さも学べた」「ウニの発生を毎日連続で観察するのは初めてでワクワクした」「ウニ受精卵から卵割していく様子を実際に見ることができ感動した」
体験したウニ発生実験の難しさ	「受精というものはすごく繊細で難しいものだなと思った」「海水を取り替える度に胚が減少し、十分な数の胚を観察することができず、4 つ子が見られなかったのは残念」「ウニの発生が止まってしまい、難しさを痛感した」

表1-2 【利尻島の自然と人々の生活が密接につながっている感覚】

学びのサブカテゴリー	学生の記載例
心に残った利尻の自然	「展望台から見る夕陽、温泉の湯りに見たブラネタリウムのような星空、キラキラ光っている海、風が強い中友達と見た大荒れの海、全て美しく札幌では絶対見られない光景」「みんなで見た夕陽、朝日、星(流れ星も)、雲のかかっている利尻富士など本当に感動した」
わかった利尻のいいところ	「人と人との深い結びつきに魅力を感じた」「高齢者の話で利尻のいいところがわかった」「自然に左右されやすいが、自然の恵みによって生活している」「街灯が少ないからこそきれいな星が見られる」「印象に残っているのは島の素晴らしさと人々の力強さ」

表1-3 【体験し見えてきた離島の暮らし】

学びのサブカテゴリー	学生の記載例
理解した利尻島の暮らしの不便さ	「大型スーパーはなく小さな商店があるだけ、バスも1日3本ほどしかない、新聞は前日の夕刊と今日の朝刊が一緒に昼にやってくる、本土より30円/ℓほど高いガソリン、本土へは飛行機か船とたくさんある不便さ」「悪天候でフェリーや飛行機が止まったら、島は取り残される」
体験してわかった水産加工の仕事	「仕事の難しさと楽しさを知ったウニパック詰めと昆布切り体験」「昆布加工・水産加工の仕事体験により利尻を生活・経済面から理解できた」
わかった気がする島に住むということ	「人々との交わりで地域の特性、人々の暮らしを学べた」「目で見て歩いて、島の暮らしを感じることができた」「不便なことがたくさんあるが、不快な印象はない」「島での生活を現実的に考えられるようになった」
自分達の生活と全くかけ離れているわけではない島の生活	「離島の生活に物資不足はあるが、十分充実していると思った」「5日間の生活や講演から、島の暮らしは自分達の生活と変わりがないと感じた」「離島も都市も文化・特色を持ち問題を抱えた町。特別視するから隔たりを生んでいるのではないが、長所を伸ばし、短所を改善することで良い方へ向かうように思う」

4) 利尻島の小学生が教えてくれた子どもの時空 (表1-4 参照)

この学びの記載は小学校で実習をした学生のレポートのみにみられ、3つのサブカテゴリーが抽出された。都市部の小学生とはやや違う利尻の『元気で親しみのある小学生』が学生の印象に残り、一緒に遊びながら『圧倒された小学生のパワーと子ども時代に戻った自分』を味わい、小学生と触れ合いながら学生が癒されたような記述であった。また上級生が下級生にとって頼りがいのある存在となっていることに学生は気づき、学生自身はかつて体験しなかった『学年を越えてつながり合う島の小学生』の関係性に気づいていた。

5) 利尻島の人々の健康 (表1-5 参照)

学びのサブカテゴリーとして2つが抽出された。長時間座って行う昆布切りの整形作業で腰痛が生じるといった仕事に関連する健康問題について、学生は身をもって理解した。また医療実習指導者が島民に多い生活習慣と健康問題

表1-4 【利尻島の小学生が教えてくれた子どもの時空】

学びのサブカテゴリー	学生の記載例
元気で親しみのある小学生	「自分達とは異なり親しみのある子ども達」「子どもたちは素直で明るく元気で、突然現れた我々を快く受け入れてくれた」「生徒からもらった手紙に感動」
圧倒された小学生のパワーと子ども時代に戻った自分	「子ども達に混じり鬼ごっこやバレーをし、給食を食べた」「久しぶりに全力疾走をするなど子ども達のエネルギーは凄まじかった」「子ども時代に戻ったようだった」
学年を越えてつながり合う島の小学生	「学年を越えたつながりが強く上級生がしっかりとまとめていたのは印象的だった」「上級生が自分達で注意し合い受入れ、場を盛り上げていた」

表1-5 【利尻島の人々の健康】

学びのサブカテゴリー	学生の記載例
島の人々の生活と健康状態との関連	「離島の小学生は生活の仕方が要因で虫歯と肥満が多くアレルギーが少ない」「タンパク質・塩分の多い食生活により、島では肥満や高血圧が多い」「老人の方の話で島の職業により生じやすい病気について知った」「ウニ加工に欠かせない利尻山の水で冷え性になると知った」「昆布の形を整える作業をする人は腰痛に悩まされている人が多かった」
目の当たりにした老々介護の暮らし	「89歳の夫の世話をしながら生活する元気な82歳の女性」「82歳の女性介護者から車椅子に対する段差をなくす工夫や寒さなどの話が聞けた」

表1-6 【利尻島の医療の現状】

学びのサブカテゴリー	学生の記載例
利尻島の医療従事者の具体的な仕事内容	「保健師の仕事の内容ややりがいを知った」「保健師の話から、医師とは違った地域に貢献する方法を知った」「家庭訪問で具体的に（訪問看護師の）仕事内容や雰囲気を知ることができた」
利尻島における医療と住民との関係	「家庭訪問で住民と医療従事者との強い信頼関係が深く印象に残った」「介護する人と医師、看護師など全てが近くつながりが深い」
人々をとりまく具体的な医療問題	「高齢化が非常に進み通院を役場の職員が手伝っている」「子どもの医療の現状や島独特の問題を学んだ」「離島の医療事情や島であるが故の制度問題が聞けた」「本土との主な交通手段はフェリーで、救急患者はヘリで搬送、そのことが引き起こす島の人々の不安を考えさせられた」
医療者の人手不足	「医師が一人のため手術室があっても手術ができないことにショックを受けた」「想像していた以上に医療機関が少なく医療人の数も少なかった」「島に理学療法士がたった一人で、専門外スタッフがリハビリを手伝う現実があった」
天候に左右される医療事情	「晴れの日には魚が忙しくて受診患者が激減することにビックリ」「島での治療に限界があれば患者を搬送するがそれは天候に左右される」

について話していただき、『島の人々の生活と健康状態との関連』の学びを得ていた。80歳を過ぎた妻が年上の夫を介護するという家庭を訪問した学生は『目の当たりにした老々介護の暮らし』の学びも得ていた。この際学生は、単に超高齢者社会の問題として現状を捉えただけではなく、利尻島の高齢者の元気さや高齢者の様々な生活の工夫に見られる活力にも関心を寄せていた。

6) 利尻島の医療の現状（表1-6参照）

ここでは5つの学びのサブカテゴリーが抽出された。どの学生も本実習以前に離島の医療現場を目にすることはなく、また入学後半年足らずの期間に大学で学んだ医療は僅かであり、島の医療の現状を理解するのは難しい点も多いと思われたが、『利尻島の医療従事者の具体的な仕事内容』を目にし、医療従事者がやりがいを得ているのを感じていた。家庭訪問先で見た住民と保健師や看護師とのやりとりから、深い信頼関係が形成されていることに気づくなど、『利尻島における医療と住民との関係』を学び、高齢化に

表1-7 【地域で働く医療人に必要な資質】

学びのサブカテゴリー	学生の記載例
見せて頂いた医療者の熱心な姿勢	「医師の横で症状を説明できない子どもへの対応を学んだ」「老健スタッフの楽しそうな協力のし合いを見て協力の大切さを学んだ」「ご老人の気持ちを汲んで人格を尊重しコミュニケーションをとる姿は本当に尊敬できた」「数時間居ただけで老人ホームで働く人々の熱心さ、仕事の大変さが伝わってきた」
聞くことができた一人の島の医療従事者としての思い	「家庭を持ちながらの地域医療が不安だったが、医師と看護師はそれについて意見を聞かせてくださった」「勉強になった指導者からのたくさん話」「離島の方々の健康、地域、仕事にかける思いを聴き色々考えさせられた」
心に残った島の先生方からの講演	「先生の講演は地域で医療に携わるということを考えさせられた」「利尻島に行った本当の目的を自覚できるほど講演に感動した」「地域の人々と交流を深めるのも立派な仕事」「何でもできるスーパーマンではなく仲間と協力してできるアンバスマンが地域医療には大事」という先生の言葉が胸にしみこんだ」
具体的にわかった地域医療の大変さと必要な視点・医療者としての資質	「地域医療に携わる人は、地域で可能な医療の範囲の判断、幅広い知識、協調性が必要」「医療体制が不十分な地域こそ医療者一人ひとりのポテンシャルの高さが必要」「知識・経験は勿論だが人間性が何よりも大事だと学んだ」「自分自身が考えて行動することが望まれる」
地域医療は地域を良く知ることから始まる	「地域医療を行うにはその地域のいいところに気がつき自分自身生活を楽しむことが大切」「地域を良く知って住民とコミュニケーションをとることが大切」「全てを見なくてはならない地域医療では、地域住民との協力関係が必要」「医療は、その人の生活や習慣、家族環境を対象としなければ根本的な解決にはならない」

表1-8 【医療福祉サービスを受ける人とかかわる体験】

学びのサブカテゴリー	学生の記載例
体験してみたデイサービス	「デイサービスでは高齢者の方と一緒にゲームやリハビリ体操をした」「ためになったデイサービスで利用者から直接話を聞けたこと」
頑張った自分の行動	「目標を合わせ大きな声でゆっくり話すことができた」「自分の抱く疑問点について高齢者の方や職員と話し合えた」「目標であった笑顔は、入所者や通所リハビリの方に話しかける時自然にできていた」「島の人の生活を理解するよう積極的に取り組めた」
認識した自分のコミュニケーション能力不足	「症状を上手に説明できない小学生患者への問診に苦戦」「お年寄りとのコミュニケーションの難しさを知った」「コミュニケーションを努力したが決して容易ではなかった」「逆に話しやすいよう気を遣っていた」「せっかくの機会なのに昆布加工場や水産加工場の方ともっとお話しできたらよかった」

よる介護力の不足や小児科受診の難しさなど離島特有の『人々をとりまく具体的な医療問題』について考えさせられていた。また天候に大きく影響される交通手段、晴れの日には漁のため減少する受診者など、離島独特の『天候に左右される医療事情』について理解した。何よりも、施設があっても医療者不足のため実施できない手術や、専門職以外のスタッフがリハビリテーションを行うといった絶対的な『医療者の人手不足』の現状は、学生にとって予想を超えていた様子が伺えた。

7) 地域で働く医療人に必要な資質（表1-7参照）

ここでは5つのサブカテゴリーが抽出された。十分に症状を訴えられない子どもへの医療従事者の対応や高齢者に対する尊重した関わりを目にし、また学生にスタッフが語ってくださった仕事への思いから『見せていただいた医療者の熱心な姿勢』を学んでいた。『聞くことができた一人の島の医療従事者としての思い』も、学生が将来について感じている個人的な不安・疑問を話したところ医師と看護師が応えてくださったという臨地ならではの学びであった。『心に残った島の先生方の講演』、『具体的にわかった

表1-9 【触れた人々のあたたかな心】

学びのサブカテゴリー	学生の記載例
島の人々のあたたかさに見守られていた実習	「皆とてもあたたかく私達を受け入れてくれた」「医療実習先ではナマコ酢までご馳走になった」「こんなに人々のあたたかさに触れて生活したのは久しぶり」「生き生きと仕事をしている人たちも大好きになった」「島の方々の優しさに触れられてとても嬉しかった」「積極的に行動できたのは私を動かすような利尻の方の配慮をたくさん頂いたから」
教員から伝わってきた学ぶ楽しさ	「引率者が楽しそうなのがこの実習の特徴で、その雰囲気伝わってきたから私達も楽しめた」「先生達の熱心さや楽しむ時は楽しみ、学ぶときは学ぶ姿勢が伝わってきた」「自分達の行動を後押ししてくれる印象を受けた」
島の人々や教員の協力があってこそ実現した実習に感謝	「様々な方々の協力があってこそ実現できた離島地域医療実習に感謝しつつ、一生ものの体験ができたことを嬉しく感じている」「美しい自然、人々のあたたかさ、スタッフの熱意に触れ、実習させてもらったことへの感謝の気持ちが湧いた」「充実した実習は、多くの先生方や島の人々の協力があってこそ」

表1-10 【実習中に行った仲間づくり】

学びのサブカテゴリー	学生の記載例
実習仲間との間に生じた連帯感	「楽しい時間を過ごさせてくれた GP メンバーの友人に感謝」「他学科の学生と協力し実験・実習・生活を共にすることでわかった協調性の大切さ」「助けてもらうことが多い中私がしてあげられることもあった」「異なる職種がともに同じ課題を考え意見を聞き合うことは、チーム医療の基本だ」「多くの学生と意見や考え、抱く夢を交換した」
以前より発展した人との関係性	「周りへの気配りと協調性のある行動について学べた集団生活」「話したことも無い人と人見知りせずに関わることができたのは自分の成長」
仲間関係が危うくなる時	「お互い疲れてくると周りがよく見えない」

表1-11 【意識させられた学習の不足】

学びのサブカテゴリー	学生の記載例
島の人々との触れ合いが不足していた感覚	「島の人々の生の声をあまり聞けず、離島の暮らしの困難さ・楽しさを考えられなかったかもしれない」「思ったより利尻の人々との話す機会が少なかった」
実習での学びを自分で発展させられないもどかしさ	「学んだことを生かして今の利尻に求められている具体的なことは考え出せなかった」「何となく町や人を眺めたり話を聞くのでは地域を診ることはできない」「(色々聞いた) 話の内容を深められなかった」

地域医療の大変さと必要な視点・医療者としての資質、『地域医療は地域をよく知ることから始まる』の3つは、主に利尻島の医師の医療講演から得られていた。講演者の強いメッセージ性のある話は、学生に地域医療人としての資質を強く意識させていた。学生は「何でもできるスーパーマンではなく仲間と協力してできるアンパンマン」という地域において求められるチーム医療の一員としての在り方、人々の生活要因や家庭環境など病気の背景をよく知ることの重要性、求められる人間性ということを中心に強く刻んでいた。

8) 医療福祉サービスを受ける人とかかわる体験 (表1-8参照)

この学びは医療実習で学生が施設利用者とふれあった体験から得たもので、3つのサブカテゴリーが抽出できた。『体験してみたデイサービス』はそれまで見たこともなかったデイサービスの実際を共に過ごしながらかつて理解した学びである。医療福祉施設で施設利用者に自ら話しかけるというのは学生にとって大きな挑戦であり、積極的に関わり話を聴けたという成果を得た学生は『頑張った自分の行動』と評価していた。一方で『認識した自分のコミュニケーション能力不足』についての記述も多く見られ、その内

容を見ると関わりを試みた対象者がコミュニケーションに難しい要因を持ち関わりに熟練性を要する場合と、学生にとって自ら話しかけるという行為自体が難しい場合があった。

9) 触れた人々のあたたかな心 (表1-9参照)

この学びは生活体験先で出合った仕事をする人々、医療実習先で出合った島の人々やスタッフ、実習中支えてくださった現地のボランティアスタッフなどとの触れ合いから得られたもので3つのサブカテゴリーが抽出された。「とてもあたたかく私達を受け入れてくれた」、「こんなに人々のあたたかさに触れたのは久しぶり」と感じた学生は、島の人々の心に感動し、「生き生きと仕事をしている人たち」を「大好き」になり、多くの学生が『島の人々のあたたかさに見守られていた実習』であったと記していた。この気づきの関連として記載されていたのは『教員から伝わってきた、学ぶ楽しさ』である。教員も学生とともにプログラムを体験していたが、学生は「教員が楽しそうで、その雰囲気伝わってきた」、「親身であった教員」、「教員は行動を後押ししてくれた」と感じていたことがわかった。実習終了後、学生は人々から受けたあたたかな心に対し、『島の人々や教員の協力があってこそ実現した実習に感謝』の気持ちを表現していた。

10) 実習中に行った仲間づくり (表1-10参照)

仲間づくりに関する学びとしては3つのサブカテゴリーが抽出された。学生は毎日協力して実験・実習を行い生活を共にする中で協調性の大切さを実感し、お互い助け合いながら『実習仲間との間に生じた連帯感』を育み、他者との関わりができるようになった『以前より発展した人との関係性』を獲得していた。一方で少数ではあるが、疲れて周囲への配慮ができなくなり『仲間関係が危うくなる時』を感じた学生もいた。

11) 意識させられた学習の不足 (表1-11参照)

学生が自覚した学習の不足として2つのカテゴリーが抽出された。『島の人々との触れ合いが不足していた』と学習活動の不十分さを感じた学生は、人々の生活の様子をわかったという感覚が乏しかったようである。また様々な体験をし話を聴くことができたものの、「その学びを生かし具体的に考えることができなかった」と実習体験を自分の中に意味づける学習基盤の不足を自覚し、『実習での学びを自分で発展させられないもどかしさ』が生じた学生も存在した。

12) 明確になった地域医療に対する自己の意識 (表1-12参照)

これに関しては2つの学びのサブカテゴリーが抽出された。実習後、将来に向けて「地域で働きたい気持ちが強くなった」とする学生が多く、地域医療に貢献したい気持ちを記した学生もあり、『自分の中で強くなった地域医療への志』を意識していた。離島などのへき地における地域医療の厳しさも学生は認識しており、そのことから自分には

表1-12 【明確になった地域医療に対する自己の意識】

学びのサブカテゴリ	学生の記載例
自分の中で強くなった地域医療への志	「将来のビジョンがより明確になった」「受験の頃の地域医療への熱意とモチベーションが戻ってきた」「地域で働きたい気持ちが強くなった」「期待に応えられる OT になりたい」「実習後地域医療に貢献したいと思うようになったのは、実習で医療現場で働く人や患者さんと触れ合っただけで、自分でも力になれるのなら幸せなことだと思えたから」「離島での医療にものすごく興味がわいた」
意識させられた厳しい地域医療	「地域で働く条件は厳しいが誰かが積極的に動かなければならない」「自分は地域医療の場に貢献できるだろうかと考えさせられた」「過酷な条件で働く覚悟が必要な地域」「地域医療に貢献するにはあまりに未熟で自信をなくした」

表1-13 【自己への気づき】

学びのサブカテゴリ	学生の記載例
自分自身への対峙	「自分の足りない点・改善すべき点に気づけた」「自分が志す職業、自分の将来や働く地域について真剣に考えた」「自分の父母、祖父母、自分自身が老人ホームに入ってから死ぬということは考えられず、老人ホームって何だろうという疑問が残った」「本当に地域住民に必要とされ、仕事内容に満足できるのか」「多くの学生と意見交換をしながら自分の考えの甘かったところ、意外な進路等を見出すことができた」
医療人として自分が何を身につけたらよいかの理解	「自分の立場の理解・自覚、責任ある行動と自ら地域医療に関する知識を得ようとする大切さを学んだ」「医療人として考えるべきことの多さを知り、更なる勉強の必要性を認識した」

できるだろうかという『厳しい地域医療に対する自信喪失』も数名に見られた。

13) 自己への気づき（表1-13参照）

実習中の学習や学生同士の話し合いから医療人を目指す『自分自身への対峙』を真剣に行った学生は、改めて自分がめざす職業の可能性や将来について考え自分を見出す機会を得ていた。一方で、老人ホームという施設の存在を自分の世界の中で理解することが難しいまま疑問を解消できなかった学生もいた。また実習全体から、将来に向けて『医療人として自分が何を身につけたらよいかの理解』を得て、勉強の必要性を認識していた。

2. 今後の自己課題（表2参照）

離島の地域医療に関する学びの記述の後、学生は今後に向けた自己課題を記載した。その内容は、表2に示した『コミュニケーション能力の向上』、『必要な積極性』、『今回の学びを今後の学習につなげること』、『地域医療に必要な学習の推進』、『磨いていく医療従事者としての人間性』、『人との関係性』の6つが抽出された。

考 察

学生のレポートから抽出された学びの分析結果から、学生の学びの様相、地域医療の学びと学生自身の気づき、早期体験および4学科合同による実習で得る学びの3つに焦点を絞り、以下に考察を述べる。

1. 身をもって地域を知るという学びの様相

地域の自然や地理的状況が地域住民の生活とどのようにつながっているのかという理解は、単に知識・情報を聞いて

表2 今後に向けた自己課題

自己課題	学生の記載例
コミュニケーション能力の向上	「うまくコミュニケーションが取れるよう日々の授業を重んじ知識・技術を身につける」「医療に不可欠なコミュニケーション能力を高めなければならない」
必要な積極性	「積極的になる」「自分のやりたいこと知りたいことに対する主体的・積極的なアプローチ」「多くの人と会話し知ろうとする積極性が必要」
今回の学びを今後の学習につなげる	「今回得られたリアルな現状・体験を思い出しながら地域医療の学習に取り組む」「今回広がった視野を様々な視点から物事を捉えることに役立てていく」
地域医療に必要な学習の推進	「他の地域にも行きその地域の医療を知る」「地域医療がどうあるべきかを考え自分の視点でしっかり実際を見つめる」「必要なたくさんの知識を身につける」「パートナーシップをもっと学びたい」
磨いていく医療従事者としての人間性	「技術もだが人間性をもっと磨かなくてはならない」「これからの3年半、立派な医療従事者になる努力をしよう」
人との関係性	「チームで活動する上で自分の得意分野を生かし助け合うこと」「相手への尊重」「今回得た他学科の友だちとの出会いを大切にしていこう」

たことによるのではなく、日々の生活や水産加工の仕事体験を通して得られたものが多かった。医療講演では“地域医療は地域を知ることから始まる”ことが強調されたが、学生には様々な体験を重ねる度に実感を伴って利尻島という地域の暮らしが見えてきたようであった。長時間の昆布切り作業で腰が痛くなることや、利尻山の湧水は水産加工業を助ける恵みでもあるが一方で働き手に冷え性をもたらすことも、実際の体験をから理解できたのではないかと思われる。人々の生活が利尻山や周囲の海と密接して成り立っていることを生き生きと感じられたとき、学生はそれまではただ感動していた利尻の自然を再認識しているようであった。学生は利尻島の自然に感動し、島の人々のあたたかさに触れ、島とそこに生活する人々に強く惹きつけられたのだが、この好ましい感情が、利尻島という地域への理解を進め、さらに【明確になった地域医療に対する自己の意識】につながっているように思われた。

ベナーとルーベル⁹⁾は、旧来の心理学は動機づけの説明の際に“関心”の役割を見落としてきたと指摘し、現象学的見地から「人が世界に心を奪われ関与するのは、関心を通じて世界に巻き込まれているからである。その結果、人は当の関心事に関係ないし影響を持つ刺激・合図を機敏に察知できるようになる」と、感情移入とは異なる“巻き込まれ”の重要性を述べている。また、「人間が状況に引きつけられ、あるいは巻き込まれ関与できるのは感情を通じてである」と、関心を高める際に感情が果たす役割について言及している。

本実習において学生は数多くの感情が揺さぶられる体験をし、自己の世界に入り込んできた利尻島や島の人々の世界に巻き込まれて関心を高め、この地域のために自分は医療者として何ができるかと自己に問いかけていた。感動の体験が学びを促進する大きな要因の一つであったと言える。学生は、将来医療の受け手に関心を向け、その世界に巻き込まれながら必要かつ可能な治療やケアを創造していかなければならない。思いやりやケアリングのある

医療には、情意教育が必要であると医療の各分野で言われている¹⁰⁻¹³⁾が、本実習における巻き込まれの体験は、感性と思考という情意領域にも働きかけており、人間性のある地域医療マインドの形成に寄与していたのではないだろうか。

離島地域医療実習という名称ではあるが、本実習の学習の場は医療関係の場に限らなかった。学生は顕微鏡下の世界で生命の始まりを観察しながら命の神秘さや尊厳を思い、その生命を育む利尻島の自然の雄大さや恵みの中で人々が生かされていることに気づき、島の重要産業の仕事を体験しながら【利尻島の自然と人々の生活が密接につながっている感覚】と【利尻島の人々の健康】とのつながりを実感していた。実習の概要で示したように、地域を知るための様々な体験が実習3日目までに行われ、その合間に診療所長や病院長からの医療講演があり、4日目に医療実習が実施された。学生の学びがどのように形成されていたかに注目すると、学生は「生命－地域の自然－人々の暮らし－健康」という順序で行われた実習におけるそれぞれの学びを関連づけて理解していた。すなわち、実習期間中の体験の順序性も大きな学びの要因であったと思われる。

もう一つの学びの様相として、学生は教員の様子から伝わってきたものについても述べており、教員が学生と共に学び楽しんでいて雰囲気が学生の学習環境の一部になっていたことが推測された。興味関心をもって体験しわかっていくことを楽しむ教員の様子に触発され、学生もまた躊躇なく興味を持ち楽しむことができる効果的な学びの環境ができていたのではないかと考えられる。

2. 地域医療の学びと学生自身の気づき

医療講演において学生は、【地域で働く医療人に必要な資質】についての理解を深め、自分の医療的な能力と人間性を磨く必要性を自覚していた。利尻島での医療の現状に関する内容の他、地域の人々との関係や、いかに利尻島という地域に溶け込んでいるのかという講演者の個人的な活動の話は、学生が島の様々な場所で体験したことと符合し、一層学生の地域医療への関心を高めたように思われた。

一方で、人手不足、高齢化、交通手段の限定、離島地域に合わない制度などによる地域医療の厳しい現状を見聞する度に、学生は「自分は地域医療をやっているのか」、「自分はこれでよいのか」と自己に問い、今後身につけるべき能力、学習・課題を意識すると同時に、自己の可能性に不安を覚えてもいた。すなわち、学生が見聞した離島の医療の現状は、学生の学習意欲を高めると同時に、不安も引き起こしていることが分かった。

一部の医学部学生（地域医療枠による入学者）は、入学当初から地域医療を志しており、利尻の地域医療を少しでも理解しようと積極的に質問を行い、知り得た内容について自分なりの考察を深めようとしていた。しかしやはり現状の理解を深めるには知識的基盤が未だ乏しく、【意識さ

せられた学習不足】にあるように、「もどかしさ」という消化不良を自覚していた。このように地域医療への志が最初から高い学生に対して、どのように学習要素を積み上げていくかの検討も必要と思われた。

3. 早期体験および4学科合同実習に関する学び

日本の医学教育における早期体験実習は、学生のモチベーションを高め社会的立場を自覚させることや使命感を持たせることを目的に1980年頃より試みられ¹⁴⁾、その後各医療分野における基礎教育での実施が報告されている¹⁶⁻¹⁹⁾。実習のねらいはモチベーションの向上や動機づけ、対象者理解、医療を受ける人とのコミュニケーションの体験、医療職業人としての自覚や倫理観の育成などである。これらの教育効果は、今回レポートから抽出された学びのカテゴリーにも認められた。同時に早期体験実習であるが故の困難さの一つにコミュニケーションがあり、多くの早期体験実習の報告でもそのことが指摘されている。神庭ら²⁰⁾や松下ら²¹⁾は、ふれあいを目的とした地域看護領域における早期体験実習で生じたコミュニケーションの困難さを報告しているが、学生の戸惑いを対象者理解や援助にはコミュニケーションが重要であるという学びとして位置づけている。本学の離島地域医療実習においても、特に医療福祉施設における高齢者とのコミュニケーションに戸惑いが見られ、今後の自己の課題とする学生が多かった。また仕事体験におけるコミュニケーションの反省もあがっていたが、何かを理解しようとするときの必要な学習姿勢として積極的なコミュニケーションを意識したものと思われた。

離島地域医療実習は、医学部医学科、保健医療学部看護学科、理学療法学科、作業療法学科の4学科合同で行う実習という特徴も持ち合わせていた。近年、複数学科合同でチーム医療の学習を目的とした実習も試みられており、医療における各職種の役割理解、連携の重要性などの学習効果が報告されている²²⁾。今回分析した学生レポートからは『実習仲間との間に生じた連帯感』や『以前より発展した人との関係性』についての記述があったが専門分野の違いを相互理解するような学びは認められなかった。

「両学部合同が当たり前という錯覚に襲われていて、医学部だけの実習はイメージできない」、「チーム医療を意識するのではなく自然に出来上がっていけばいい」という記載が少なからずあった。これらは、学生たちが最初から専門分野のみを強く意識するのではなく、学部が異なっても、同じスタートラインに立ちたいという気持ちの表れと思われる。専門の違いを理解するための意図的な学習要素が本実習の中に含まれていなかったことも、このような記載の背景にあったと考えられる。数名ではあるが、「実習自体に他学科を意識するものがあまりなく残念」という意見もあった。多学科合同で行う実習の意義は十分検討されてこなかったが、地域で重要となるチーム医療を理解するために、専門分野や役割意識を明確にさせる学習が、

1 学年前期の実習において必要であるかの検討も今後の課題であると考えます。

ま と め

平成20年度離島地域医療実習に参加した学生の実習レポート記載内容を分析し、実習における学生の学びについて検討した。大きな目標であった学生の地域を知るという学びは、日々の生活や島の仕事、人々とのかわりなど多くの体験を通して離島の暮らしを感じながら習得されていた。学生は島の自然と島民に感動しながら関心を高め、そのことが生き生きとした学びを促進していたという特徴があり、利尻島という実習の場がそのような学びを可能にしていたと思われる。学習に不足の部分を確認しながらも、ほとんどの学生は貴重な体験・学びができたという充実感をもって実習を終えることができていた。

謝 辞

本学の離島地域医療実習にご協力くださった利尻島利尻町および利尻富士町の保健医療福祉関係の皆様、利尻島の水産加工業の体験学習の機会を快く提供してくださった漁業部の皆様、水産会社の皆様、利尻島の理解を助けてくださった利尻町立博物館学芸員の皆様、自然探索を後押ししてくださったボランティアの皆様、GP事務局の皆様、レポート分析に協力してくださった学生の皆様に深く感謝申し上げます。

文 献

- 1) 澤田いずみ, 今野美紀, 相馬仁他: チーム医療を学ぶ臨地実習, 札幌医科大学「地域密着型チーム医療実習」, 看護展望31: 904-911, 2006
- 2) 相馬仁, 明石浩史, 澤田いずみ他: 医学部・保健医療学部合同カリキュラム「地域密着型チーム医療実習」, 医学教育38 (Suppl.): 90, 2007
- 3) 今野美紀, 澤田いずみ, 高橋由美子他: 地域医療マインドをもつ医療人の育成, 札幌医科大学医学部・保健医療学部合同カリキュラム「地域医療合同セミナー」の評価, 日本ルーラルナース学会誌4: 51-57, 2009
- 4) 山田恵子, 高橋延昭, 宮下洋子他: 医学部・保健医療学部1年生を対象とした利尻島における離島地域医療実習, 「ゼロからの出発」, 札幌医科大学保健医療学部紀要12: 37-43, 2010
- 5) 添田晴雄: 学ぶことと教えることー看護活動への示唆ー, 鈴木正幸編, 看護のための教育学, 「知る」から「分かる」への教育, 東京, メヂカルフレンド社, 1993, p13-46
- 6) ゲイバーソンK.B., オールマンM.H., 勝原裕美子監訳:

臨床実習のストラテジー, 東京, 医学書院, 2002, p 71-72

- 7) 奥山則子, 松田正己, 斉藤恵美子他: 標準保健師講座 1, 地域看護学概論, 東京, 医学書院, 2008, p154-155
- 8) 金川克子編: 最新保健学講座 1, 地域看護学概論, 東京, メヂカルフレンド社, 2008, p9-10
- 9) ベナー P., ルーベル J.: 現象学的人間論と看護, 東京, 医学書院, 1999, p98-102
- 10) 田畑邦治: 情意教育の意味と可能性をめぐってー生活体験と価値体験からー, 看護展望18: 870-874, 1993
- 11) 日下隼人: 医学教育における情意教育, 医学教育26: 413-416, 1995
- 12) 敷地雄一: 理学療法教育の現状と問題点に関する一考察, 情意教育・問題解決能力を中心に, 高知県理学療法6: 39-44, 1999
- 13) 秋山智, 佐藤一美: 学生の経験からみた臨床指導者の様相, 「情意」という側面からの考察, 看護教育46: 110-115, 2009
- 14) 重田定義: 学生のモチベーションを高めるための試みとしての初期病院研修, 医学教育9: 198-200, 1978
- 15) 山本裕二, 武市昌士, 佐賀医大における「Early Exposure」, 医学教育17: 168-174, 1986
- 16) 塚田トキエ, 馬竹美穂, 落合宏: 富山医科薬科大学部看護学科早期体験実習に対する学生の反応, 富山医科薬科大学看護学会誌1: 79-87, 1998
- 17) 柳久子, 戸村成男, 森淑江他: 医療・福祉現場における早期体験実習 (early exposure), 筑波大学医学専門学群における経験, 医学教育33: 43-49, 2002
- 18) 相原優子, 勝山貴美子, 渡邊順子他: 看護学生が捉えた早期体験実習における体験の意味, 日本看護医療学会雑誌7 (2): 27-35, 2005
- 19) 真野泰成, 野口隆志, 山田治美他: 早期体験学習 (Early Exposure) の実施とその評価, 国際医療福祉大学薬学部における取り組み, 医療薬学33: 702-709, 2007
- 20) 神庭純子, 松下延子, 藤生君江他: 4年生看護基礎教育過程の1年次「ふれあい実習」の教育効果 (1報), 学生の自己評価を分析して, 岐阜医療大学紀要2: 107-114, 2008
- 21) 松下延子, 神庭純子, 小林貴子他: 4年生看護基礎教育過程の1年次「ふれあい実習」の教育効果 (2報), 学生の実習記録記述内容を分析して, 岐阜医療大学紀要2: 115-122, 2008
- 22) 川野道宏, 高橋由紀, 梶原祥子他: チーム医療を目的とした早期体験実習 (early exposure) の学習効果と意義, 看護学科学生の実習前後のアンケート調査から, 茨城県立医療大学紀要14: 123-133, 2009